IgA 腎症における病理組織学所見と尿酸動態についての検討

西川 元¹⁾ 西尾信一郎¹⁾ 山口雄一郎¹⁾
上竹大二郎¹⁾ 疋田 美穂¹⁾ 岡部 英明¹⁾
五味 秀穂¹⁾ 市田 公美^{1, 2)} 大野 岩男¹⁾
細谷 龍男¹⁾

目 的

腎生検時の高尿酸血症はIgA 腎症患者の長期腎機能予後に対する危険因子であることが報告されているが、尿酸排泄動態と腎生検所見について検討された報告は少ない。そこで今回、われわれはIgA 腎症における病理組織学的所見と尿酸動態について明らかにすることを目的として、腎生検施行時の血清クレアチニン値、血清尿酸値、24時間蓄尿を測定し検討した。

対象と方法

対象は平成21年~平成23年の3年間で当院にて腎生検を行った症例のうちIgA 腎症と診断された全80例（男：女 = 52：28）、年齢 41 ± 13 歳、血清クレアチニン値、血清尿酸値、クレアチニンクリアランス（CCr）、尿酸クリアランスを測定し、病理組織所見（糸球体硬化率、間質傷害度）との関連について統計学的に解析を行った。

結 果

血清尿酸値は 6.8 ± 1.6 mg/dlであった。80例中46例に高尿酸血症を認め、46例全例が尿酸排泄低下型であった。高尿酸血症群における糸球体硬化率は $28.3 \pm 21.4\%$ と非高尿酸血症群 $16.8 \pm 13.7\%$ と比較して有意に高率であり、間質傷害度に関しても高尿酸血症群 $25.4 \pm 20.8\%$ と非高尿酸血症群 $13.8 \pm 11.2\%$ と有意に高率であった。また糸球体硬化率と尿酸排泄率（FEUA）には相関はみられなかったが、間質傷害度とFEUAには正の相関がみられた。さらにCCrとFEUAには負の相関がみられた。

考 察

腎機能低下がみられる症例では、糸球体硬化率とは関係なく、間質傷害度が強いほど単位ネフロンあたりの尿酸排泄が亢進していると考えられた。

1) 東京慈恵会医科大学腎臓・高血圧内科

Hajime Saikawa, Shinichiro Nishino, Yuichiro Yamaguchi, Daijiro Uetake, Miho Hikita, Hideaki Okabe, Hideho Gomi, Kimiyoshi Ichida, Iwao Ohno, Tatsuo Hosoya

2) 東京薬科大学薬学部病態生理学

Kimiyoshi Ichida